





める場として、本学会はさらにその機能を高め、発展することが強く期待されています。本学会の長い歴史と伝統に加えて、この新たな使命を果たす掛け替えのない場として、本学会に寄せられる期待は極めて大きいと言えます。

この大きな期待に対して、本学会、そして本研究誌の現状はどうでしょうか。2日間の研究大会を通してフルに大会に参加し、積極的に大会テーマを追求する参加者は残念ながら多くはないようです。また学会の担い手である社大同窓生と在学生、教員の三者が本学会の場で積極的に交流し意見を交わし、社会福祉実践・研究に対するそれぞれ役割を統合させる役割も必ずしも十分ではありません。研究誌についても、研究大会記録集という位置づけに甘んじている側面があります。

このような現状に対して、本学会・研究大会の持ち方を大きく変えようという動きが学内から起こっています。在学学生幹事有志が今年度研究大会終了後から集まり、来年度研究大会に向けて繰り返し議論を重ね、自分たちがもっと積極的に参加できるよう企画を練っています。また学会評議員を中心とした本学教員たちも、全体企画がより社大同窓生・在学学生・教員のニーズに合ったものになるよう企画を立案しています。このような動きに対応して、本研究誌の位置づけも少しずつ変化して来るものと考えます。

繰り返しになりますが、本学会・本研究誌の果たして来た使命に加えて、新たな社会情勢の中でこれから果たすべき本学会の役割は極めて重要です。本学会が本学会会員、同窓生・在学学生のために、もっと有用で有益なものになるよう、皆さまとともに知恵と力を合わせて行きたいと考えます。皆さまのご協力のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。

**文献** 大橋謙策 (2010). 「社会事業」思想・実践の復活と本学リカレント教育の隆盛. 社会事業研究 49号: 2-3.

2014年1月

日本社会事業大学社会福祉学会会長

日本社会事業大学学長

大 島 巖

